



活用されない方がいいのですが…

何かあれば

レクリエーション保険を お役立てください

昨年度より、受講生のみなさん全員を対象にレクリエーション保険に加入しています。講座受講のために家を出られてから帰宅するまでの事故に対応します。屋外での講座だけでなく、座学でも「階段を踏み外して…」など、危険はいっぱい。時間に余裕を持って参加するなど、気を付けていただいているとは思いますが、万一何かあった時は、速やかに事務局までご連絡ください。

運営委員、通年募集中です♥

この社会人大学校の運営は、ボランティアの運営委員で行っています。各講座の運営と毎月の運営委員会、並行して翌年度の講座の計画も行います。そろそろ、次年度の講座の検討が始まります。1年以上先の予定まで決めるのは大変ですが、みんなで知恵を出し合います。アイデアをお持ちの方、ぜひ運営委員に加わってください!!

活動は交通費実費支給のみで無償ですが、どの講座でも無料で受講できます。「やってみようかな」と思われたら、受付に声をかけてください!!

5月の各講座の概要と、ひとこと感想から

(感想は一部を抜粋したのもあります。ご了承ください)

◆時事問題講座 5月7日

「26年間、妻の介護を通して見えてきたもの」 講師:鈴木元氏

講師の鈴木氏が、26年間にわたって奥さんの介護をされた経験を軸に、介護する側・される側の思い、社会資源や制度など、介護にまつわる状況を様々な視点で説明されました。介護する者と介護される者の性別による対応の難しさ。ヤングケアラーの問題、介護と仕事、老々介護、障害者の介護など、介護の現状は様々です。人は高齢によって介護が必要になるとは限らず、事故や病気などで突然介護が必要なる場合が多いとのこと。鈴木氏の奥さんも、ガン、ヘルペス脳炎、てんかんなど多くの病気にかかり、障害者となりました。その奥さんを長年支えてこられた話は、かなり衝撃的な内容だったと思います。

その経験から、対応についていくつかの提示もありました。

- ①各種の制度を知る必要がある。制度利用にあたっては思い通りにならなくても、手続きの窓口で怒ったりせず、繰り返し粘り強く相談することが大事。
- ②仕事と介護の両立がないと経済的には苦しい。そのためには可能な限りプロに委ねることが大事。自宅介護にこだわらず施設入所も選択肢。
- ③本人の残存能力を活かして「生きがい」と「居がい」を見つける。死んでもよい命などない。

私は「居がい」の話聞きながら、中島みゆきの「命の別名」の歌詞の一節を思いました。「…僕がいることを喜ぶ人がどこかにいてほしい…」



制度を利用するとか施設を考えると、大事な視点だと思いますが、今、その制度などが改悪されて利用がせびめられていることに大変不安を覚えています。

とても身近な問題ですが、重く、希望の持てる事ではないので、積極的に考えず、そうなったときに考えようと遠ざけてきました。生きがいの問題は考えさせられる部分が多かった。

◆寄席芸鑑賞講座 5月9日

「講談についてのお話を聞き講談を楽しむ」 講師：旭堂南龍氏

第二回の寄席芸講座は、講談師の旭堂南龍さんを招いて、講談の歴史を学びその魅力を体感するものでした。南龍さんの生き生きとした語り口と豊富な知識に触れることで、参加者は日本の伝統芸能に対する理解を一層深める貴重な機会となりました。

講談の起源は仏教にあり、仏教の説法を笑いを交えて話すスタイルから始まったとされます。元々は本を目の前に置いて読み上げるだけの形式でしたが、多くの方が文字を読むことができなかつたため、講談師が読み上げることで「なるほどなあ」と皆が納得するスタイルでした。講談は単なる朗読から、手振りや身振りを交えたスタイルへと進化し、最終的には本を読まずに話すスタイルが確立されました。

「左甚五郎」の話しを聴きました。話の展開に一喜一憂し、話に聞き入ってしまいました。真剣な面持ちや、突然の面白さに引き込まれました。

あっという間に前半が終わり、後半では「おぼろの便り」という話が披露されました。またもや真剣に話に聞き入りながらも、時折の笑いが会場に響き渡り、南龍さんの絶妙な間と話の展開に、次に何が起こるのかという期待感が高まりました。充実した講座でした。最後の質問時間に参加者さんからの質問に南龍さんの講談風のお答えが素晴らしかった。会場は再び講談を聞いているかのような錯覚に陥りました。素晴らしい回答でした。あっという間の充実した講座でした。旭堂南龍さん有難う御座いました。



講談で歴史も学べる。楽しく可笑しく聞かせて貰いました。

神田伯山さんが有名になられ、講談を知りました。今日の講談を聞き、話の流れがどうなるだろうと引き込まれました。

講談に「新作」というのは、あるのでしょうか？

真剣な中にも笑いがあり、伝統芸の凄さも感じました。



◆写真講座 5月21日

「身近な花もかわいいな」 講師：四方智基氏

今年度初めての撮影会です。三段池公園武道館の会議室で、まずは花の撮影のポイントを講義。同じ花を「絞り」の数字を大きくして、また小さくして撮ってみる。縦位置、横位置で構えてみる。背景の色をどうするか。講義を聴いた後、自分のカメラを確認。「絞りは…F…だったかな？」互いに教えあえるよう、キャノン組、ニコン組とカメラごとに大まかにグループ分けもして、三脚を持って植物園へ出かけました。庭園をじっくり見て撮影する人、温室に入りランなどの撮影に夢中になる人。バラ園はちょうど見頃、たまたまバラの様子を取材に来ていた両丹日日新聞の記者に会い、講座の様子を翌日の記事にしてもらいました。今回も、6月の講座までの宿題が出されています。

「絞り」が少し分かってきて、違いを確認できた。たくさん花、面白かった。



教えてもらったことを、これかな？それかな？と思っているうちに時間が…

◆歴史講座 5月15日

「対話に基づく歴史教育の可能性」

講師：井口和起氏



歴史総合の授業は近現代史の学習が中心である。18世紀からの世界と日本のつながりの中で、国や地域同士の関係性の変化に関わる諸事象について、その現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を理解し、事象の背景や原因、結果や影響などに着目し、日本を含むアジア諸国とその他の国や地域の動向を比較したり、相互に関連付けたりするなど、資料から歴史に関する様々な情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付け、多面的・多角的に考察し表現することを学んでいく。

グローバル化の背後で分断や対立が進む現代の世界で、歴史教育・歴史認識が社会において本来の役割を發揮するためには、多元的で複眼的な理解が必要である。自己と他者の歴史を共に学び、自らの歴史を深く学ぶと同時に他者とのどのような関係性の中で形成されてきたかを知る。歴史認識は一方的に注入されるものではなく、歴史研究と歴史教育と歴史実践の循環構造の中で形成され、不断に更新されるものであり、その全過程で対話という要素が重要となる。他の文化圏・他国との対話が成り立たないと歴史認識は形成されない。対話を基調とし、多元性や多様性を重んじる歴史認識を形成するサイクルが健全に機能し続けることによって、歴史を対立や紛争の道具ではなく未来を切り開く手がかりとして位置づけ直すことが必要である。

60年前高校時代の世界史の授業を思い出していました。「できごと」の羅列で歴史を学んだ。ヨーロッパ、中国、日本の歴史はそれぞれの関連がわからぬまま、暗記教科と理解していた。先生の話から初めて歴史を学んでいる気がしました。

質問の時間をもう少し多くしてほしい。

たくさんの資料を用意してもらっていたので帰ってからしっかり学習したい



◆北近畿探訪講座 5月22日

「京都の畜産を学ぶ」

講師：京都府農林水産技術センター畜産センター職員



実際に牛を見たのは中学1年生の頃（約60年前）以来…

今回、綾部市にある京都府農林水産技術センター畜産センターを訪ね、京都の畜産というテーマで講義と、乳牛の搾乳と育牛の現場を見学し、説明を受けました。生き物に関する講座は、すご技の動物園以来です。前半の座学では最初に家畜の説明があり、乳用牛、食用牛で始まりましたが、その中でミツバチは法律上、家畜に定義されていることを聞かされ驚きました。もっとも、数で言えば小さいながらも最大の家畜かもしれません。畜産の現状については生産、歴史、食に関する文化などを学びました。

後半は牛畜舎に入り、担当の方から牛の育て方、搾乳の仕方やその時に使用する機械の説明などしてもらいました。畜産業は機械化が進んできたと言われていますが、まだまだ人の手をかけなければならないところが多く、従事する人は休むこともままならず大変な仕事です。また牛について、少し前は口蹄疫病があったり、家禽（鶏）では鳥インフルエンザがあり、農家は家畜から目を離して就業することは許されない環境です。

私たちが子どもの頃、馬は外敵からの襲撃に対応するため（逃げること）立ったままで寝ると聞かされていましたが、牛に胃袋が4つあるのは、野生の時代には素早く草を自分の体内に取り込んでいたためだそうです。これは、外敵に襲われる前に1番目の胃に詰め込んで、安全な場所で2番目以降の胃でゆっくりと消化する構造がつくられていった、とのことです。今回も現場を訪ねて、また新たな発見に出会えました。



【今回、ひとこと感想用紙の挟み込みができていなくて、参加いただいた受講生のみなさんの声を集めることができませんでした。申し訳ありませんでした。】

◆漢字学講座 5月23日

「漢字の字形と部首」

講師：久保裕之氏

漢字を作った人は、できあがった漢字だけを残して、その作り方を残してはくれなかった。今から 2300 年ほど前からいろいろな人たちが作り方を考えた。

そこで、1900 年前に許慎という人が『説文解字』を作る。

六書（りくしょ）・・・漢字のでき方

- ・象形（物の形を簡単に線で表す）
- ・指事（形のないもの、一つの形では表せないものを記号で表す）
- ・会意（意味を合わせて新しい意味を表す）
- ・形声（漢字しかないから、読み方も漢字で）
- ・仮借（同じまたは類似の音の別字で代用）
- ・転注（名前は出ているが何のことだかよくわからない）

『説文解字』とは、この時に漢字はもう 9353 字あった。それを 540 のグループに分けた：部首。全部の漢字の成り立ちを説明した

『説文解字』から 1600 年後、清の時代に『康熙字典』が作られる。漢字は 47000 字をこえていたが、部の数はだんだん減り 214 部になった。

『康熙字典』の部首の分け方が漢字字典の手本になった。

作りすぎた漢字をどうしたらよいか？ 人々は、グループに分け部を作り、グループのトップ首を作った。

今回の講座は、たくさんつくった漢字を部と首に分けるといいう講義でした。漢字にたずさわった先人の苦勞が身に沁みましました。「漢字は世界で一番長く使われている文字である。」今日もユーモアたっぷりで、楽しい講義でした。

漢字の成り立ちのうち、「形声」は理屈としてはわかりますが日本語と中国語では発音が異なるので日本語を基にすると納得がいくのですが許慎のいる中国を考えるとどうなのか不思議に思います。音的には中国語と日本語は単独の文字の読みでは類似しているのでしょうか。

「部首は何ぞや」だったけどなんとなくわかったような、いやまだ未知なるような。

奥が深すぎます。わかりにくいのは面白いです。

毎日使っている漢字の成り立ちを学ぶと文字を読んだり書いたりすることが楽しくなってくる。昔の人は形のないものもよく漢字にしたものと感心するばかりである。

内容が多く消化不良気味。でも面白い。部首のところで「」はなぜ刀部なのですか。

漢字は一日にしてならず。長い歴史の中でいろんな人が努力してつくられたことを知る時、心して使わねばと思う。

飛び入りでしたが大変楽しくしかも視覚(?)も多く用意していただき学びやすかったです。クイズもあり講義も工夫されていました。私も大学で受講したいです。学生がうらやましいです。

